第一〇号に寄せて

吉見　孝夫

第一〇号をお届けします。「つ離れ」という言葉があります。「一つ、二つ、三つ……八つ、九つ」ときて、次は「十（とお）」と続き、それ以降「つ」が付きません。もともとは寄席の隠語で、お客が一〇人以上になることをいうそうです。小誌も「つ離れ」したことになります。当初は三回は続けたいというつもりで、三号雑誌を目指しました。月並みな謝辞となりますが、ここまで続いたのは読んでくださる方々のお蔭です。

若い研究者の存在を知りました。お一人は東京大学大学院の李澤珍氏です。『伊曽保物語』の系統に正面から取り組んでいます。驚くのはその資料の厳密なまでの取り扱い方です。一例を挙げれば、文献を引用するに当たって翻字、翻刻の類は一切利用しません。いや、複製、影印すら使わないのです。専ら原本を用います。李氏には次の二論文があります。特に後者は古活字版『伊曽保物語』研究の期を画するものといえるでしょう。

明治初期のイソップ寓話受容における『伊曽保物語』の影響について――渡部温編訳『通俗伊蘇普物語』を中心に（『超越文化科学紀要』第二一号、二〇一六年一〇月）

『伊曽保物語』版本系統の再検討―B系統古活字本の本文比較を中心に―（『近世文藝』第一〇六号、二〇一七年七月）

もうお一人は『漢訳イソップ集』の編者内田慶市氏の下、関西大学大学院で学ぶ崔善娥氏です。こちらは朝鮮半島におけるイソップの受容をテーマとしていますので、専門的に評価する資格が私にはありません。しかしその修士論文を読む限り、韓国語、日本語、中国語、英語の資料を駆使した労作であることはわかります。私のワープロソフトではハングルを表示することができませんので、英語のタイトル名を示しておきます。

A Study on the Korean translation of Aesop's Fables -Focusing on "Usunsori" by Yun Chi-ho

遠藤潤一氏から原稿をお寄せいただきました。『邦訳二種伊曽保物語の原典的研究　総説』（風間書房、一九八七年二月）のⅣの（5）「イソポ伝『本国の事』及びイソポ伝の題字の問題（アテエルスと云国のアリシテスといふ人）」で取り上げられた課題に関連するものです。掲載誌として小誌を選んでくださったことに感謝いたします。

今号では主に古活字版無刊記第三種の『伊曽保物語』を取り上げました。これは新村出蔵本（現重山文庫蔵）が現存唯一です。かつて日本古典文学大系『仮名草子集』で森田武氏が「第三種は、新村先生のお手許に見つからないとのことで、まだ調査の機会に恵まれていないが」と書いて所在不明と思われたせいでしょうか、これを実際に閲読した人は少ないと思われます。所有者以外で調査したと確実にいえるのは、『古活字版の研究』の著者川瀬一馬氏、中川芳雄氏、それと上記の李澤珍氏ぐらいではないでしょうか。川瀬氏とは、その晩年に来札された折に、氏の教え子小泉弘氏に後藤秋正（あきのぶ）氏と私が誘われて四人で会食した記憶があります。当時は古活字版に特別な関心もなく、また東京文理科大学での人間関係を率直にお書きになった文章を読んでいましたので、気むずかしい方と勝手に思い込み、碌に教えを乞おうともしなかったのが悔やまれます。

古活字版無刊記第六種も中川芳雄氏が所蔵していたのが唯一の伝本とされています。これの所在が不明だったのですが、最近わかりました。いずれ現所蔵者の手で公表されることと思います。ついでに付け加えると、無刊記第五種本とされる林若樹旧蔵、現重山文庫蔵の一本が、実は無刊記第六種本であると判明いたしました。明らかにしたのは李澤珍氏です。私もこの本は実見していたのですが、第五種本とばかり思い込んでいましたので、全く気づかなかった次第です。不明を恥じます。

今号で取り上げた『もとかしは』は、石田元季が一九三八年に還暦と自著の刊行を記念して、蔵書中の近世版本（一部写本も）を古筆手鑑のように切り貼りして折本に仕立て友人知人に配布したものです。その中に古活字版の『伊曽保物語』が含まれています。『伊曽保物語』の切断というと、小誌第七号で取り上げた天理図書館蔵の巻子本『伊曽保物語』は挿絵を切り取った跡が顕著です。益田鈍翁が佐竹本三十六歌仙絵巻や西本願寺本三十六人家集をズタズタにしたのも思い起こされます。昨今のいわゆる自炊のために本をバラバラにするのはともかく、稀覯書や美術品に刃物を当てることを躊躇しない心理は私の理解の範囲を超えます。

「パンチャタントラ」はイソップとも関連するインドの動物寓話集です。この原形を示す「タントラ・アーキャーイカ」のドイツ語本を、説話文学研究者の西村正身氏が翻訳されました。概略四百字詰め原稿用紙換算六百枚以上になるでしょうか。「タントラ・アーキャーイカ」は、これまで日本語では部分訳しかなかったようです。西村氏には、当面雑誌、書籍の形でこれを公表される予定はないそうです。関心をお持ちの方は吉見までご連絡ください。お許しをいただきましたので、仲介役を務めます。

山野博史氏からは参考資料をお送りいただきました。お礼申しあげます。